

「世界の夜明けから夕暮れまで」は、ミロスワフ・デンビンスキとマチェイ・ドルィガスが創ったプロジェクトです。世界中数都市で映画大学学生のために開いてきた、ワークショップの経験に基づくものです。学生たちは教授の芸術的指導を受けて、ひと月間で、都市を主人公に数本の記録映画を共同制作します。最終的に、いくつかの都市の肖像画を描いた、各1時間の記録映画ができあがります。

芸術面での前提条件

一人一人の学生は、1時間の時間帯を選び、その時間に継起するシチュエーションを探します。短い記録映像の一つ一つが、劇的構造を持つ独立した全体です。同時に、それらが集まって、1時間の記録映画を構成するのです。製作は、次のように進みます。一人一人の学生が「自分の時間」の映画を考案し実現します。学生グループ全員が作った映画たちが、一都市の「夜明けから夕暮れまで」の肖像画にまとめられます。さらに、各国で作られた映画が集まって、「世界の夜明けから夕暮れまで」を描き出すことになるのです。

形式面での前提条件

エチュードは、演出や挑発を用いない、観察のメソッドを用いて作られなくてはなりません。ニュース映像とはまったく異なる作品です。

1本1本の映画は、4-5分の長さが適当です。時間の制約を設けることで、視覚的に劇的な構成と簡潔さが保証されます。1本ずつのショートフィルム、そして

完成した映画作品は、「^{ディテール} ,細部から ^{メタファー} ,暗喩へ」の手法を用いて、構成されるべきです。

私たちは毎日、TVで世界中の映像を見ている——戦争、地震、政治的なデモ、サッカーの試合、証券取引所のニュース、ファッション・ショー。重要なニュース素材は、世界中のあらゆる場所から同時中継されています。でもどうでしょう、これらのニュースを集めると、私たちの世界についての真実がわかるのでしょうか、それともこれらのニュースは、表面的な反省にすぎないのでしょうか？ 「ヘッドライン・ニュース」の表層の下にさらに深く入っていくことは可能でしょうか？ 北京の魚市場の売り子のほほえみや、モスクワの地下鉄にいる物乞いの思索的な容貌の方が、現代世界とその状況について、私たちにより多くのことを物語るのではないのでしょうか？

私たちは、現実観察という記録手法をウッチ映画大学の学生たちに提案しました。3年の実施期間中に、私たちは「ウッチの夜明けから夕暮れまで」を大学のカリキュラムにしました。

この度、私たちは、私たちと同じ仕事をしている、ヤツェク・ブワウト、マルツェル・ウォジンスキ、ヴィタ・ゼラケヴィチウテなど、著名なポーランドの記録映画作家を、世界の5大首都で「世界の夜明けから夕暮れまで」というプロジェクトを実施するためにご招待することができました。ミンスク、キエフ、モスクワ、北京、東京の映画大学学生が、自分の街についての記録映画を撮ります。しかし、これらの映画は、私たちが毎日テレビで見ているものとはまったく別のものになるはずです。

このようにして一連の映画ができれば、それは私たちの現代世界についてより深く考えるための出発点となることでしょう。

ミロスワフ・デンビンスキ、マチェイ・ドルィガス

モスクワ、キエフ、ミンスク、東京、北京には、共通点はわずかしかなかったりません。文化的に異なっているし、異なった言語と歴史を持っている。これらの都市は、すでに何度も記述されてきました。それぞれの都市にはステレオタイプがあって、それが長い年月をかけて、広く知られている都市のイメージを作り上げました。

しかし、こうした一般的なイメージの下に、別の現実があります——多様な、多次元的な生活です。私たちはそうした生活の脈動を感じ取りたいのです。表面を覆う殻を貫く手段を見つけたいのです。そして、劇的なあるいは滑稽な瞬間に、極めて深く個人的な経験をする人間についての真実に到達したいのです。私たちは生活の欠片を微細に観察することを通して、こうしたことのすべてに達したいのです。

午前6時 ミンスク

音楽大学教授でオペラ歌手（テナー）のウアジミル・Zは、いっぱいにくれた重いリュックを背負って家を出、郊外にある^{ダーチャ}別荘に向かう。

ダーチャ別荘——本当は軍隊から不用品として廃棄された貨物列車だ。彼は、リュックから煉瓦を数個取り出し、自分の手で暖炉の一部を組み立てる。彼は10時までに仕事を終えなくてはならない。彼の歌唱レッスンが始まる時刻だからだ。

午前10時 ミンスク

コラ・Fは市営墓地の墓堀人だ。彼は悠然と墓穴を掘っている。穴の脇には、故人の遺体が置かれ、家族がいる。正教会の司祭の代わりに、市役所の役人が立っている。皆辛抱強く待っている——穴が開かないことには、葬式が始まらないからだ。

午後7時 ミンスク

カリノフスキー広場。警官が「アイ・ラブ・ベラルーシ」と書かれた、ハート形のバレンタイン・カードを持っている、数人の若者の身分証明書を検査する。やがて、広場を散歩する恋人全員が身分証検査の対象になる——念には念を入れて。

午前5時30分 キエフ

「ウクライナ」ホテルのゴーゴー・ダンサー、イリナ・Cは、勤めを終えたところだ。ハイヒールの音を響かせながら、人影のないマイダン（独立）広場を横切る。地下道で、彼女はキルティングの防水服を着込んだ老婆から肉団子を買う。二人の女はお互いの目を見ようとしない。地下鉄の中で、カラフルな服装のイリナは、早朝勤務に急ぐ灰色の群衆のなかに溶け込んでしまう。

午前11時 キエフ

歴史博物館。1930年代の大飢饉の展示室。ガリナ・Sは棒に巻いた雑巾で大理石の床を拭いている。彼女は、歪んだバケツの中で、雑巾を辛抱強く濯ぎ、それから絞る。泥だけの靴を履いた小学生たちの群れが金切り声をあげながら、オレンジ革命の展示室を駆け抜けるのを、押しとどめようとするができない。

午後10時 キエフ

チンパンジーの飼育係サシャ・Mは、サーカスの出番が終わってから、メイクを落としている。彼は疲れていて、淋しい。煙草に火をつけ、何回か吸い込むとチンパンジーのターニャに手渡す。ターニャは煙草を巧みに口にくわえると、同じように吸い込み、鼻の穴から煙を出す。ターニャもまた、物思いにふけているようだ……。

午前7時 モスクワ

モスクワ市民の群れが、地下鉄ホームの深淵という永遠に向かって伸びるエレベーターに立っている。どの顔も疲れ、表情がない。彼らのシルエットは、黒い闇の中に消えていく。新興宗教「神への旅」のメンバーであるイエヴドヒミヤ・Gは、謙譲な身振りで、入会を勧めるチラシを手渡している。受け取る人もいれば、受け取らない人もいる。「神は到る所に」と書かれた、色鮮やかで俗悪なチラシは、エレベーターに載って地下鉄駅の深みへと下りていく。

午後2時30分 モスクワ

バレエ学校。柔軟体操の授業の休み時間。バレエの衣装を着た1年生が鬼ごっこをしている。一人ぼっちのアニャ・Kは、大鏡の前に開脚の姿勢で座っている。サハリンに住んでいる母への手紙を几帳面に書く——「ママに、会いたい」と。

午後11時30分 モスクワ

イエレナ・Cとアンドレイ・Sの結婚式。酔っぱらった客たちは、新郎新婦にキスを促す掛け声（「苦い、苦い！」）をかける。千鳥足の花嫁は、同じくらい泥酔している夫の唇に唇を押しつける。祝宴が開かれているのは、スペース・シャトルを改造して作ったレストラン「ブラン」。このシャトルが宇宙を飛ぶことはなかった——宇宙開発計画が中止になったためだ。

午前6時 北京

リン・ヤン・Tは家を出る……。

午前11時 東京

A・ヤマモトはバスに乗る……。

さて、北京や東京では、夜明けから夕暮れの間、何が起こるのでしょうか？ 私たちのアジア人学生たちの感受性と観察能力によって、ヨーロッパから遠く離れた世界の、ユニークでこの上なく個人的な肖像画が創造される——私たちはそう考えています。

ミンスク、キエフ、モスクワ、北京、東京——これらの都市の肖像画の一つ一つに、学生たちの個人的な痕跡が残されることでしょう。私たちの仕事は、学生たちの感受性を刺戟し、劇を構築する方法を指示して、意味のより高い次元を生み出すことができるようにすることです。

一本一本の映画は一つの都市を描きますが、これらが一つに合わさるとき、観客のなかに、現代世界についての思索を促す、あるイメージを生み出すに違いない——私たちはこのように期待しています。

ミロスワフ・デンビンスキ

ポーランド国立ウッチ映画大学教員

- 20年以上にわたり記録映画を製作
- 約30本の映画を監督 代表作は

『オレンジ色の二者択一』(1989) 『イカルス』(1999) 『敗者と勝者』(2004)
『ベラルーシ語の授業』(2006) 『音楽パルチザン』(2007)

- 国際映画祭で80以上の賞を受賞

アムステルダム映画祭特別賞、オーバーハウゼン映画祭特別賞、ライプツィヒ映画祭特別賞、クラクフ映画祭「銅の棒馬」賞、サン・フランシスコ映画祭金門賞、ウッチ映画祭「白いコブラ」賞など

マルツェル・ウオジンスキ

アンジェイ・ワイダ映画演出マスター・スクール教員

- 約40年にわたり記録映画を製作、約40作品を監督、代表作は

『宛先不明郵便』(2008) 『痛くないように』(1998) 『何が起こっても不思議ではない』(1995) 『ヨーロッパから89MM』(1993) 『ぼくの場所』(1986)
『マイクのテスト』(1980) 『高校卒業試験』(1979) 『どのように生きるべきか』(1977)

- 国際映画祭で50以上の受賞

オスカー(ノミネート)、フェリックス賞——欧州最優秀記録映画賞、オーバーハウゼン映画祭グランプリ、ライプツィヒ映画祭「金の鳩」賞、クラクフ映画祭「金の竜」「金の棒馬」賞、サン・フランシスコ映画祭金門賞、ウッチ映画祭「白いコブラ」賞など

マテウシュ・ヴェルネル

ステファン・ヴィシンスキ枢機卿大学教員、映画批評家・理論家、著書数冊、論文数10点

映画ワークショップ「ポーランド・ロシア」「ポーランド・イスラエル」発案者、組織者

マチェイ・J・ドルィガス

ポーランド国立ウッチ映画大学教員

- 20年以上にわたり記録映画を製作 代表作は

『人民ポーランドの一日』（2005）『希望の声』（2002）『無重力状態』（1994）
『私の叫びを聞け』（1991）

- 20以上の国際映画祭で受賞
- フェリック賞———欧州最優秀記録映画賞、クラクフ映画祭「銀の竜」、ベルボルン映画祭グランプリ、モンテカルロ映画祭グランプリ、イタリア特別賞、サン・フランシスコ映画祭金門賞、ウッチ映画祭「白いコブラ」賞など

ヤツェク・ブラウト

アンジェイ・ワイダ映画演出マスター・スクール教員

- 30年以上にわたり、記録映画を製作、約30作品を監督、代表作は
『夜はまだ』（2008）『戦士』（2007）『王冠をかぶったネズミ』（2005）『死産』（2004）『アブノーマル』（1990）
- 60以上の国際映画祭で受賞
- トロント映画祭グランプリ、グディニャ映画祭「銀獅子」賞、クラクフ映画祭「金の棒馬」「銀の棒馬」賞、マンハイム映画祭特別賞、サン・セバスチャン映画祭特別賞、ウッチ映画祭「白いコブラ」賞など

ヴィタ・ゼラケヴィチウテ

アンジェイ・ワイダ映画演出マスター・スクール教員

- 数年にわたり記録映画を製作、代表作
『統合失調症』（2001）『壁の向こう』（2007）『源』（2009）
- 国際映画祭での受賞歴
- ヒューストン映画祭ゴールド・レミー賞、ウッチ映画祭「白いコブラ」賞、キエルツェ映画祭グランプリ

パヴェウ・ウォジンスキ

グダンスク映画大学教員

- 20年以上にわたり記録映画を製作
- 10数本の映画を監督 代表作は
『化学』（2009）『ドアとドアの間』（2004）『姉妹』（1999）『こんな話』（1999）
『階段』（1996）『生地』（1992）
- 国際映画祭で多くの賞を受賞
- ベルリン映画祭欧州大賞、ライプチヒ映画祭特別賞、クラクフ映画祭「銅の棒

馬」「銀の棒馬」賞、クラクフ映画祭「金の竜」賞、ウッチ映画祭「白いコブラ賞」、ライブチヒ映画祭「金の鳩」賞など

ヤツェク・ペトルイツキ

ー30年以上にわたり、映画製作、映画撮影に携わる

ー撮影監督として100本以上の作品に関わる 代表作は

『田舎役者』(1978 アグニェシュカ・ホラント監督) 『アマチュア・カメラマン』(1980 クシシュトフ・ケシロフスキ監督) 『尋問』(1982 リシャルト・ブガイスキ監督)、『容赦なし』(1993 クライヴ・ゴードン監督)、『谷』(1998年 ダン・リード監督)、『隣家のピペリン』(2005年 ニノ・キルタゼ監督)

ー国際映画祭で数十の賞を受賞

カンヌ映画祭国際映画批評家連盟賞、シカゴ映画祭ゴールデン・フゴ賞、モスクワ映画祭グランプリ、カンヌ映画祭最優秀主演女優賞、ベルリン映画祭最優秀ヨーロッパ映画賞、フェリックスヨーロッパ映画賞ノミネート(撮影部門)、英国アカデミー賞(撮影部門)、1999年「プリ・イタリア」賞、ビアリッツ映画祭グランプリなど

ラファウ・リストパト

グダンスク映画大学教員

ー数年前から記録映画・劇映画の編集者 代表作は

『カティンの森』(2007年 アンジェイ・ワイダ監督)、『黒い木曜日』(2011年 アントニ・クラウゼ監督)、『他人の手紙』(2011年 マチェイ・ドリガス監督)、『一覧表作り』(2010年 パヴェウ・ウォジンスキ監督)、『神のいない街』(2009年 ヤツェク・ペトルイツキ監督)、『宛先不明郵便』(2008年 マルツェル・ウォジンスキ監督)

ー国際映画祭で受賞

ポーランド映画「鷲」賞 最優秀編集賞ノミネート

ポツダム映画祭編集賞

コシャリン映画祭編集賞など